

クリスマスという「光」

丸山 勉

[聖書] マタイによる福音書 2章 1～12節

イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

『ユダの地、ベツレヘムよ、

お前はユダの指導者たちの中で 決していちばん小さいものではない。

お前から指導者が現れ、わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』

そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

[序] クリスマスは「夜」の出来事

今日このようにして、ご一緒にクリスマスの礼拝を捧げられますことを神様に感謝しています。皆様お一人おひとりに、クリスマスの主の恵みが豊かにございますように！

主イエス・キリストのご降誕、それは、「夜」の出来事でした。「夜」というのは、自然が作り出す「闇」です。私たちの日々、一日一日は、「光」が当たる昼の時間もあれば、その「光」が隠される「闇」の時間もあります。その「昼」と「夜」で一日です。「光」だけ、「闇」だけということはないですよ。私たちの一生も、またそうなのではないでしょうか？そして、イエス・キリストが誕生されたことを告げるクリスマス物語は、これが「夜」の出来事であったということを私たちに伝えてくれていることは、意味があることだと思うのです。

ルカ福音書では、羊飼いたちが寝ずの番をしていた時に天の御使いが現われてイ

エス様の誕生を告げています。ベツレヘム郊外の「夜」の物語です。そして今日の**マタイ福音書**の記事も、やはり「夜」の物語とって良いと思います。ここでは「**星**」とその星が導く「**光**」が、重要な役割を与えられています。クリスマス・ツリーを想像してみてください。「星」は最も重要な飾りで、それがなければツリーは完成しません。そうなのですね、確かに福音書を読むと、この星の存在がなければ、東方の博士たちはイエス様に見（まみ）えることは出来なかったのです。今日、そのことの意味をご一緒に思いめぐらしてみたいと思っています。

[1] 東方の博士とは

今、東方の「**博士たち**」と言いましたが、新共同訳では、「**占星術の学者たち**」となっています。これは原語は、「マゴス」というギリシャ語ですが、一般に英語で言うとワイズマン「賢者」という意味のようです。町の指導者のような存在で、学問、特に占星術に関わっていて、この世の出来事の予兆を見極める才能を持っていた、一目置かれていた人物であったようです。今度発行されたばかりの聖書協会訳の聖書では「**博士たち**」となっていました。

この「**東方**」と言うのがどこなのか不明ですが、もしかすると、エルサレムのずっと東にある**バビロニア地方**であったかもしれません。その場所は、バビロン捕囚の際に連れて来られたユダヤ人たちが、暮らしていました。やがてバビロニアは滅ぼされ、ユダヤ人たちは帰還しましたが、捕囚の期間も、彼らは**旧約聖書の言葉**を聞き続けて励まし合っていました。それをバビロニアの人々、特に学者たちは興味を持って聞き、調べたということは十分考えられることです。

例えば、**民数記の 24:17**には、メシア預言とも言えるこのような言葉があります。「わたしには彼が見える。…ひとつの星がヤコブから進み出る。ひとつの笏がイスラエルから立ち上がり／モアブのこめかみを打ち砕き／シエトのすべての子らの頭の頂を砕く。」—「ひとつの星がヤコブから進み出る」と。この「**ひとつの星**」とは何なのか？この世界を変える大いなる力を持った方らしい。誰のことだ？東方の博士も、——彼らは旧約聖書を知らなかった異邦人たちなのですが——心に大きな一つの**求め=求道心**というべきものを与えられたと言っても良いのではないのでしょうか。

[2] 不思議な旅

この博士たち、よく言われているように、三人であったかどうかは分かりません。あとで「**黄金・乳香・没薬**」を捧げたと書いてありますから三人と捉えてしまうのですが、人数は書いてありません。それにしても、**何と不思議で大胆な旅**だったことでしょうか。すぐに帰って来られるような**保障はどこにもない旅**です。食料のことも考えると付き人も沢山いたのかもしれませんが。大体、冷静に考えると、目的

がきちんと果たせるのかどうかも怪しいものです。けれども、そんな備えのこととか日程のこととか、聖書は全く書いていません。興味がないのです。重要なことは、この博士たちが、ただ預言の星を見出したら、**その星の導きに従って、救い主に会うための旅に出で立った**、ということです。**単純すぎる**、と私たちは笑うでしょうか？しかし、考えてみたいと思います。私たちが主イエスと出会うということ、それは、**私たちの側の備えが十全であるから出会えるのでしょうか？**或いは、一生懸命聖書を読んで**頭で理解する**ということが、主イエスと出会うということなののでしょうか？——そうではないと思います。イエス様は、ある時仰いました。「**心を入れ替えて幼な子のようにならなければ、決して神の国に入ることは出来ない**」と。

この博士たちは、「**求める心**」(求道心)とも言うべきものが与えられ、「**幼な子の心**」のまま、旅に出かけたのです。しかし、その旅が可能になったのは、「**導くもの**」(星の光)に身を委ねたからです。彼らは、学者でしたけれども、謙虚だったのです。自分は導びかれなければならない存在であることを受け入れていたのです。ここに幸いがありました。

[3] ヘロデの「不安」と私たち

この博士たちとは**対照的**なのが、ここに記されている**ヘロデ**ではないでしょうか。強い権力を持っている**ヘロデ大王**。バックには強力な**ローマ帝国**があります。また彼は建築の才能もありました。とりわけ**エルサレム神殿の改築**には力を発揮しました。しかし、彼はとても**猜疑心が強かった**と言われていています。いつか誰かが自分を滅ぼして権力の座を奪うかもしれない。そういう気持ちにスイッチが入ると、妻や親類、子供たちでさえ殺害したと言います。このクリスマス物語は、このようなりアルな史実の中での、「**イエス誕生**」なのです。

ヘロデは、東方の博士たちが新しいユダヤ人の王の誕生を告げる星に導かれてエルサレムにやってきたことを知って、「**不安を抱いた**」とあります。これは「**恐れを感じた**」ということです。何の恐れか？—自分が無力な者とされる恐れ、権力を奪われる恐れです。**権力がアイデンティティーであると、それが失われると、その人はもう生きていけなくなる不安・恐れを抱くのだ**と思います。まだ幼な子の誕生がすぐ自分の地位を脅かすなどとは考えにくいことですが、この時のヘロデは冷静さを失っています。事実、このあとの聖書の記述では、ヘロデは、ベツレヘム周辺の二才以下の男子をみな殺せ、という狂気に満ちた命令を下しています(2:16)。実際この博士たちも、考えてみれば危険な所にいるのです。ただこの時は、ヘロデは、「**行って、その子**のことを詳しく調べ、見つかったら知らせしてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した」とあります。博士たちを生かして、利用しようとしたのです。

このような、爽やかでない話というのは、私たちはもう現実に、嫌と言うほど聞

いてきています。そしてどこかで思うのではないのでしょうか？悲しい事だけれども、権力ある者には従うしかない。それが自分を、また家族を守る道だ。そう考える人があっても私は一概に非難は出来ません。…けれども、私はハッとしたのですが、聖書はリアルです。この2:3の「エルサレムの人々も皆、同様であった。」という言葉です。つまり、ヘロデと同じ心を皆抱えて生きている、ということを聖書は見抜いているのだ、と私は思いました。

[3] 東方の博士たちの「喜び」と献もの

博士たちの旅は、ここから新しい局面を迎えます。この旅は**死の危険**をも孕んでいるのです。しかしそこでも、彼らを導いたのは「**星**」でした。闇の中、ひととき不思議に明るく輝く光が彼らの**行く道**を作りました。彼らは、あの**アブラハム**と同じです。「行く先を知らずして旅立った」のです。そこにあるのは、**単純な信仰**です。彼らが頼ったのは、「**御言葉の光**」でした。**神の言葉**が現実となって、今、自分たちを導く光となっている。まことの神を知らないでこれまで生きてきた異邦人である私たちをも、こんなにはっきりと「**こちらへ来い**」と招いてくれている！彼らは、神様が自分たちに語っている現実**に心を打たれた**のです。ですから聖書は言います。

「**出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。**」(9～10節)——権力を持ちながら、不安と恐れに捉われているヘロデ。一方、遠くの国からはるばると、ただ単純にメシアと言われる方に会いたいと長旅をしてきた、政治的には全く無力な東方の博士たち。しかし、彼らの心は「**その星を見て喜びにあふれた**」のです！

彼らは、ついに到着したのです。母マリアに抱かれています幼な子イエスです。人となった**神**です。私たちは聖書から知らされています。**人間たちの罪の歴史、悲しみ、痛み、それをみんなその身に負われるために、いえ、十字架で、罪人である人間たちに殺され、しかしそこで人間たちを滅ぼすのではなく、自らが命を献げることによって、人間たちに神の赦しと、神の国を保障するために、この地上に、人としてのスタートを始めるために幼子となって下さった主イエスとこの日、博士たちは見(まみ)えたのです。**

ですから、**彼らがしたことは一つ**でした。この方をまことの神とすることです。「**拝みにきたのです。**」(2:2)。正に**礼拝**です。これが彼らの旅の目的でした。——礼拝の中心は何でしょうか？「説教を聞くこと」でしょうか？「賛美を歌うこと」「祈りを捧げること」でしょうか？—それは礼拝式の一要素です。私はこの頃思うのですが、礼拝の全ては、「**己れを捧げること**」ではないか、と。神様に前にひれ伏し、“我がものはなし、すべてはあなたの恵みです”と捧げることではないのでしょうか。何故なら、**主イエス様が、私たちにすべてを献げて下さったから**です。

私は正直に言いますと、礼拝の中の「献金」というのがしんどいなあ、辛いなあ、と思う時期もありました。けれども、全財産を捧げなさいとは神様はおっしゃいませんよね。無理強いを神様はなさいません。けれども、本当に神様の恵みによって生かされていることが分かると、お金の使い方の考え方が変わって来ます。額は神様と相談して自分で自由に決めればいいのですし、**自分が献げること、主に献げられるということが喜びになってきます**。礼拝の中の「献金」とは、とても重要で、また**喜びの出来事**なのだという事が、最近少しだけ分かってきたような気がしています。

—この博士は、「喜びにあふれた」ので、ずっと運んできた「宝の箱」を開けて、**黄金・乳香・没薬**を献げたのです。黄金・乳香・没薬。これには色々な意味があるでしょう。どれが正解・不正解ということもないでしょう。ある司祭は、これは人間の「**財産**」「**感情**」「**理性**」と考えても良いのではないかと、言われます。「**財産**」「**感情**」「**理性**」、つまり、人間が生きる上で不可欠な内的・外的な三要素だと言うことです。それを——救い主と出会う事によって、自らを——明け渡してゆく。つまり、**自らをお委ねする人生、捧げる人生に変えて頂くことへと導かれる**ということなのです。

己れに頼ることは、傲慢になるか、絶望的になるかです。**ちっぽけなプライド**は、まるで**砂の上のお城**を作っているようなもの。そこに**安定した喜び**はないでしょう。安定した喜びは、**私たちの「死」を超えた、まことの命**を確認してくれる方が「**共にいる**」という、その何にも替えがたい喜びです。「わたしはいつもあなたと共にいる」(インマヌエル)と宣言される主イエスが確かにお生まれになった。それがクリスマスです。

[4] 到達点、そして出発点

私は初めに、**クリスマスは「夜」の出来事**だと申しました。博士たちは「夜」、この星を仰いだのです。当たり前ではないと思います。星は、夜にしか見えないというのは神様が自然界を通して語ってくれる**メッセージ**のように思えて仕方ありません。私たちは、**自分の心の闇**に気が付かされる時があると思います。そして、それを打ち消そうとします。しかし、それをまるで無いかのように偽る必要はないということを聖書は語ってくれているのだと思います。「光は闇の中に輝いている」とヨハネ福音書は初めの方で語っています。「闇の中」にこそ、**光は輝く**。これは本当ですよ。主イエスは、「**まことの光**」として私たちの只中に所に来て下さったお方です。

博士たちを導いたこの星は、「**幼子のいる場所の上**」に留まりました。星は、「ここです、あなたがこれまで探していたもの、求めていたもの、深く心が憧れていたもの、この人生は虚しくないということを教えてくれるものは、ここにある」と私たちを救い主との出会いの場に導くのです。ここが、人生の旅の到達点です。

エディット・シュタイン(聖テレサ・ベネディクタ)という人はこう語りました。
—「**ベツレヘムの星は／今日もなお／暗い夜に輝く星である。**」

彼女は、ユダヤ人商家の家に生れたのですが、10代半ばで無神論者になったそうです。その後思索を深め、哲学者として評価されるも、虚しさに襲われる時もあったので、友人宅にあったアヴィラのテレサの自伝を読むことから**主イエスと霊的出会い**を経験し、30才で**洗礼**を受け、その後カルメル会の**修道女**になりました。彼女は深い霊性に基づく著作を数多く著しましたが、最後は、ユダヤ人であるということで、あの**アウシュビッツのガス室**で殉教しました。51才の生涯でした。その彼女が言ったのです。「**ベツレヘムの星は／今日もなお／暗い夜に輝く星である。**」

イエスとまみえる。それは確かに決定的な出会いであり、ある意味到達点です。しかしそれは、博士たちにとって、**新しい歩みの始まり**でした。こう書いてあります。「**「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。**」(12節)。ヘロデのところに戻ったら、殺されていた事でしょう。博士たちは、**主イエスとの出会い**によって、「**別の道**」を歩み始めました。それは自国に戻っても、これまでとは違う、新しい生き方であったと思います。逞しくなったと思います。この人生を全部賭けて**良いお方**を知ったからです。「砂の上の人生」ではなく、「岩の上に立つ」人生を知ったからです。

[結] イエス様の「旅」の始まり

私たちは、この博士のように、イエス様と出会って、この人生をもう一度、「**新しい道・別の道**」を与えられて、**自分の持ち場へと帰って行くのだ**と思います。そこで、**喜びを持って、精一杯、自分自身を捧げて生きる生活**をしてゆきたいと思います。この地上の旅路がもうしばらく続くまで。そのあとは、神様が私たちを両腕で抱いてくれるゴールがあるだけです。

今日の記事で、イエス様ご自身の言葉は何もありませんね。まだ幼な子ですから。けれども、この東方の博士たちの旅が終わってから、まるでそれが合図であるかのように、**イエス様の旅が、エジプトへの避難から始まって、十字架に向かう旅が、すぐに始まる**のです。私たちの救いを確かにされるための戦いの歩みが、もうクリスマスから始まっているのです。

このお方を、博士たちと共に、私たちの宝、心を捧げ、ひれ伏し、拝みましょう！

お祈り致します。

私たちの闇の中に来て下さった主よ、このクリスマスを中心に感謝致します。

不安や、恐れが、私たちの中になおあります。しかしそれを凌駕する「**まことの光**」としてあなたは私たちの只中に来て下さいました。ですからもう恐れません。あなたがいつも私と共におられるからです。私の中の傲慢な心に、孤独に、そして不信仰に打ち勝たせて下さい。いつも「**星**」のごとく、御言葉と聖霊を送って下さい。私たちを霊的に逞しくし、あなたの平安で満たして下さい。

クリスマスの主イエス様の御名によって祈ります。 アーメン。